

称号及び氏名 博士(看護学) 大田 直実

学位授与の日付 平成25年3月31日

論文名 再発告知をうけた乳がん患者の心身の安定を図り満足した生活をもたらす看護介入プログラムの開発と評価  
The development and evaluation of a nursing intervention program designed to maintain the physical and emotional stability of the patients who are informed of the recurrence of breast cancer so that they can lead a satisfactory life

論文審査委員 主査 田中 京子  
副査 高見沢 恵美子  
副査 階堂 武郎

## 論文内容の要旨

【目的】再発告知をうけた乳がん患者は、初めてがんと診断された時に比べ、現実的に死を意識させられるため、心理的衝撃が大きい。また再発治療は、副作用を伴う集学的延命治療であり患者に身体的・心理的苦痛を生じさせる。再発告知を受けて3カ月以内の乳がん患者の約42%に精神的な障害がみられ、早期の援助の必要性が報告されているが、具体的援助方法は明らかにされていない。そのため再発告知を受け早い時期にある乳がん患者の心理的衝撃や身体的苦痛を緩和できる援助を検討することは必要である。そこで本研究は、再発告知を受け、治療を受ける乳がん患者の心身の安定を図り、満足した生活をもたらすための看護介入プログラム（以下プログラム）を開発し、その効果を検証することを目的とした。

【方法】Ⅰ. プログラム開発：予備研究の結果と文献的考察を基に行なった。プログラムの構成要素は身体的安定を促すこと、情緒的安定を促すこと、生活について視点の転換を促すこととし、働きかけの方法として情報提供、リラクゼーション指導、情緒的支援、認知的支援を行うこととした。介入の時期は、1回目は再発告知後2週間目、2回目は再発告知後1ヶ月目、3回目は再発告知後1.5ヶ月目、4回目は再発告知後2ヶ月目とした。

Ⅱ. プログラムの検証：対象者は再発告知を受けた乳がん患者で、うつや適応障害の診断を受けていない者とした。対象者は外来での通常ケアとプログラムを適用した群（以下適用群）とプログラムを適用せず、通常ケアのみを受けている群（以下非適用群とする）

に分けた。データ収集方法は、対象者の自記式質問紙法と面接法とした。データ収集内容は1)対象者の属性(年齢、婚姻状況、家族構成、職業、再発部位、再発治療など)、2)身体的安定状態—研究者が作成した身体症状評価票：EORTC-QLQ30の身体機能と症状面(息切れ・疼痛・疲労・不眠・食思不振・嘔気嘔吐・便秘・下痢)、3)情緒的安定状態—日本語版 POMS、日本語版 MAC、4)生活の楽しさや満足度—研究者が作成した生活満足評価票：Visual Analogue Scaleによる生活の楽しさ・満足度と半構成的質問紙による生活の状態(おかれている状況、生活の状態、生活の楽しみ、生活の目標、生活の中で満足だと思ふこと)とした。データ収集の時期は、適用群はプログラム1回目の介入前をベースラインとし、プログラム3回目および4回目の終了後に行った。非適用群は適用群と同時期に3回行った。また、プログラムの有用性と実用性を検討するために、適用群にプログラムの内容や方法、実施時期、資料の有用性とプログラム参加に関する負担感についての質問紙を作成し、全てのプログラム終了後に回答してもらった。分析方法は、統計的分析はSPSS Ver14.0を用いて行い、両群の属性は独立したt検定または $\chi^2$ 検定を行った。プログラムの効果を検証するために、経時的繰り返し分散分析を行った。有意水準は5%とした。質的なデータは内容分析を行った。倫理的配慮は大阪府立大学看護学部研究倫理委員会の審査と研究実施施設の倫理審査を受け承認を得た。研究の目的、意義、方法、研究参加の自由と中断の自由、プライバシーの保護等について文書と口頭で説明し、同意書の署名により同意を得た。

**【結果】**適用群9名、非適用群13名であった。対象者の属性である個人的背景や病状、ベースラインとした1回目の介入前の得点については、両群間で有意差は認められなかった。経時的繰り返し分散分析を行った結果、身体的安定状態では食思不振( $p=0.038$ )、便秘( $p=0.048$ )に交互作用が認められプログラムの効果が示唆された。情緒的安定状態では日本語版 POMS の項目である活気( $p=0.006$ )に交互作用が認められ、プログラムの効果が示唆された。生活の楽しさや満足度については、生活の楽しさ( $p=0.002$ )、生活の満足度( $p=0.007$ )において交互作用が認められ、適用群は非適用群と比較し、生活の楽しさや満足度を有意に上昇させた。生活の状態に関する質的内容では、適用群には再発告知後2ヶ月目に**【充実した生活ができている】****【生活に明るさや楽しさをもって過ごす】**がみられたが、非適用群にはみられなかった。また非適用群には適用群にはみられない**【生活の楽しみはない】****【生活の満足はない】**がみられた。プログラムの有用性と実用性では、プログラムの内容や方法など適切と回答したものが80%以上を占め、またプログラムの参加に対する負担感もないことが明らかになった。

**【考察】**適用群に食思不振や便秘にプログラムの効果がみられたことは、適用群それぞれが受ける治療についてのパンフレットを用いて、個別の状態に応じた情報提供や対処を共に考えたことで、対処方法が増え効果がみられたものと考えられる。活気や生活の楽しさ、生活の満足度が改善したことは、適用群に情緒的安定を促すための、傾聴や共感などを取り入れた対話や、認知的支援とした闘病記や日記を用いての対話により生活の中の目標や楽しみを見つけやすくし、充実した生活に繋がっていったものと考えられる。

プログラムの有用性では適切であるという評価が得られ、また実用性ではプログラムの負担感もないということから、本プログラムは、再発告知を受け、治療を受ける乳がん患者の心身の安定を図り、満足した生活をもたらすための看護介入プログラムとして効果があることが示唆された。

## 学位論文審査結果の要旨

本研究は、再発告知を受け、治療を受ける乳がん患者の心身の安定を図り、満足した生活をもたらすための看護介入プログラムを開発し、その効果を検討したものである。乳がんは根治手術をしても10年以内に再発する率が高く、再発後は身体的・心理的にも苦痛を伴う集学的な延命治療が行われる。また、乳がんの再発告知は、初発のがん告知に比べて患者に与える心理的衝撃が大きく、再発告知後3ヵ月以内の乳がん患者に精神的な障害が発生する割合が高いと報告されていることから、早期に援助する必要性がいわれている。このような観点から、再発告知後の乳がん患者の心身の安定と生活の満足に着目して介入研究を行ったことは、今までに行われていなかった領域であり、新たな取り組みといえる。

再発告知を受けた乳がん患者に対して、再発と再発治療に関する認知的評価、適応課題、対処方略、生活への取り組みに関する予備的研究を行い、それらの結果と文献を基に、情報提供、リラクゼーション指導、情緒的支援、認知的支援を複合的に行う働きかけは、身体的安定と情緒的安定および生活についての視点の転換を促すという点で有効な技法となっており、独創的で優れたものである。倫理的側面にも十分配慮したうえで介入およびデータ収集が行われている点も評価できる。看護介入プログラムの検証は、通常のケアに加えて看護介入プログラムを適用した適用群（9名）と通常のケアのみの非適用群（13名）とを比較する準実験研究デザインを用いた上で、身体的安定状態をEORTC-QLQ30の下位尺度、情緒的安定状態を日本語版POMSと日本語版MAC、生活の楽しさや満足度については研究者が作成したVisual Analogue Scaleと半構成的質問紙による面接法を用いてデータ収集を行い、反復測定分散分析による統計的分析と質的分析とを併用して緻密に看護介入プログラムの効果を分析しており、方法論的にも優れている。また、本研究の看護介入プログラムを適用することにより、再発告知を受けた乳がん患者の身体および情緒面での安定や、生活の楽しさ・満足度の改善が示されたことは、再発告知後の乳がん患者の看護において重要な意義深い成果であるといえる。

本論文は、がん看護学の発展を促す学術的価値を有しており、博士（看護学）を授与するに値する論文として認める。